

江戸時代の地方在住絵師の諸活動

大阪芸術大学 工芸学科 教授 五十嵐公一

「江戸時代の地方在住絵師の諸活動」という研究課題のもと研究を行った。このプロジェクトを始める時点では全く予想していなかった新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画通りに進まないこともあった。しかし、可能な限りの成果を出すことが出来たように思う。

その成果として先ず挙げたいのは、展覧会開催への協力である。和歌山県立博物館を会場として、2020年6月13日から7月12日の会期で「企画展 紀伊田辺の画家 真砂幽泉」が開催された。この展覧会への協力である。

この展覧会は「第1章 絵画学習から完成へー耕作図屏風を中心に」「第2章 通信教育で学ぶ」「第3章 京で学ぶ」「第4章 紀州での活躍」の4章立てで構成されたものであり、その出品点数は約20点だった。

内容は真砂幽泉という絵師に注目したものである。この真砂幽泉(1770~1835)は江戸時代中期の明和7年に紀伊田辺領三栖組(現在の和歌山県田辺市)の大庄屋の家に生まれ、京都に出て狩野派の絵師鶴澤探索と鶴澤探泉に学んだ絵師である。その後、紀伊田辺に戻り大庄屋本役を務めながら鶴澤家と連絡を取り続けた。そして大庄屋本役を辞した後は画業に専念した。紀伊藩から作画を命じられることもあった。当然ながら作品は田辺市を中心とした和歌山に多く残っている。

この真砂幽泉に関する資料が幽泉のご子孫のお宅で大切に守られてきて、現在それらが和歌山県立博物館寄託となっている。その内容は幽泉の完成作品だけではなく、多くの下絵、手本、書簡類などから成っている。総点数は約600点である。ただ、点数が膨大なため和歌山県立博物館では長らく未整理という状態が続いていた。

これらの資料は、地方の絵師がどの様にして京都を拠点に活躍する絵師たちから作画技術を学んだのか、その作画技術の教育システムはどの様なものだったのか、京都の師匠と地方の弟子との関係はどの様なものだったのか、という興味深い内容について具体的に教えてくれるものである。この真砂幽泉の資料整理は、近世絵画史研究のために不可欠だと私は考えた。

そこで、同じくこの資料の重要性に気づいていた和歌山県立博物館の近世絵画担当学芸員の袴田舞氏に協力する形で、私たちは平成30年から資料整理を始めた。資料点数が多いのため一気に整理することはで

きない。そのため月に一度くらいのペースで整理の機会を作り、継続していった。そのうちにこの資料整理の重要性を理解してくれた京都文化博物館の有賀茜氏を始めとする複数の近世絵画研究者が協力してくれるようになった。その結果、資料整理も進んでゴールが見えてきた。そこで、これまでの資料整理の成果を和歌山県立博物館で展覧会の形として紹介することになった。それが先述した「企画展 紀伊田辺の画家 真砂幽泉」だった。

私はこの展覧会の開催までに令和2年度塚本学院教育研究補助費を使って、和歌山県立博物館に寄託されている真砂幽泉の資料整理をなんとか完了させたいと考えていた。ところが、そこで予期していなかった問題が起きた。新型コロナウイルスの感染拡大である。資料整理は通気の良くない室内で同じメンバーが長時間作業する。通気が良いと資料にダメージを与えるからである。そのため、新型コロナウイルスの感染拡大の危険が出てきた時点から資料調査は中断せざるをえなかった。「企画展 紀伊田辺の画家 真砂幽泉」も、それまでの資料整理から分かったことに基づく中間報告という形にならざるをえなかった。

これは私たちにとって残念なことだったが、それでもこの展覧会は意義あるものになったように思う。新聞をはじめとする複数のマスコミがこの展覧会のことを紹介してくれた。また、『美術研究』(東京文化財研究所)の紙面で展覧会評も掲載された。

ただ、新型コロナウイルスの感染拡大により真砂幽泉の資料整理は中断している。そのため「江戸時代の地方在住絵師の諸活動」という研究目的に沿った別の研究を進める必要が出てきた。そこで私はいずれ再開したいと考えている真砂幽泉の資料整理に役立つ準備を進めようと考えた。具体的には真砂幽泉だけではなく、幽泉と同じように地方で活躍した絵師たちの史料収集である。この様な絵師たちの史料を集積してゆけば真砂幽泉という絵師の存在を相対的に捉えることができる。また、江戸時代の地方在住の絵師たちに共通する特質が指摘できるかもしれない。これが令和2年度の新型コロナウイルスの感染拡大後の私の研究課題となった。

この成果はすぐには出ないかもしれないが、将来必要になるものだと考えている。